

□井波一雄：東海の植物記 236 pp. 1979. 中日新聞本社，名古屋．¥980. 数多く出ている各地方の植物誌としては次の諸点で異色である。第一に大体県単位であるのが、これでは三重，愛知，静岡，岐阜と各県に亘っていること，珍らしい植物を意識的に除外したこと，全体を海辺の植物，人里平地の植物，常緑照葉樹林，温帯落葉樹林，及び亜高山・高山の植物と五部分に分ち，ことにその第一には飯沼慾齋やシーボルトの挿図を選んで説明に使ったこと，解説に普通に見る一般解説の様式を排除して目につく簡単でしかも重要な諸点を述べたことなどである。がもっとも注意すべき点は，そのほとんどの種類に対しても，「日本における植物の保護とは，皮肉にもこうして知らせず，知られないことに於て，一番完全に達せられるということは，悲しい事実であろう。有名な草へ押し寄せる野次馬の徒が多すぎるようである」といった著者の日頃の感覚がほとばしりでていることである。巻頭にホソバシヤクナゲ，エシジュウハグマの二図が光っている。文中には方言のことがでたり，過去の学者の研究がでたり，ラングスドルフやベッケルの図が出たり，中々楽しいが，引用の飯沼慾齋の絵に牧野富太郎の書き加えた図のことを落としてたり，アゼトウナの学名をマキシモウィッチが命名したなど故人を尊とぶの余りとは思うけれど少し注意して欲しかったところがある。（前川文夫）

□馬 大浦・黄 宝龍・黄 鵬成：主要樹木種苗図譜 229 pp. 1981. 中国林業出版社．¥1,800. 1972 年以来南京林産工業学院での実績からみて，林業上重要とみなされる種類 100 をえらんで実生の形態を図示し，その対面ページに種子，育苗，幼品と区別して詳細に解説したものである。中国産の主な樹種が大体拾われているのでまことに参考になる。図はすべて現寸で描いてあるので比較するに便利な一方，種子の形態などには小さすぎる面もある。裸子植物が 26 種もあり，その子葉数も 2 ページにわたって書いてある (19-20 p.)。双子葉類の樹木もいろいろでているが，*Eucommia*，ケンボナン，キハダ等の第一葉が対生であるのに次の葉から互生にかわるなどわかって興味を持てた。もっと沢山のものの実生の形態が報告されんことを望むものである。子葉の数などかなり誤植があるのを惜しむ。（前川文夫）

□中原清士（監修），羽賀 実：岡山の野の花 春 253 pp. 1982. 山陽新聞社，岡山．¥2,000. この頃，各府県単位で手頃な図版集がよく出版される。それらはそれぞれ各地のものも含んでいて面白いが，本書は写真がよく撮ってあるのと岡山県に特徴的な植物を写しているのとで中々すぐれていると思う。スハマソウ，サンインシロカネソウ，ウスギヨウラク，シロバナネコノメなど中々よい写真である。春の部 (1-5 月)，夏秋の部 (6-12 月) の 2 部分に分けてあり，スマレは全部拳がっているのも楽しい。ただ一つハマウツボは恐らくヤセウツボであろうと思う。配列が半ば分類，半ば任意で複雑だが，存外役に立つのは一寸予想外であった。夏秋の部はまだ出ないがそれが出るのを期待したい。（前川文夫）